

京都市未来まちづくり100人委員会

第3期

平成22年11月～平成23年12月

成果報告書



目次

| | |
|--------------------------------|-----|
| 1. はじめに | 1 |
| 2. 代表挨拶 | 2 |
| 3. 100人委員会のこれまでの軌跡と今後の展望 | 5 |
| 4. 5部会の成果 | 9 |
| 5. 13プロジェクトの成果 | 59 |
| 6. <資料> | 163 |

平成23年12月17日

京都市未来まちづくり100人委員会



平成20年9月に設立された京都市未来まちづくり100人委員会は、平成22年11月より3年目（第3期）を迎え、第1期・第2期から継続している委員、第3期から新しく参画した委員、あわせて131人の委員が1年余の期間に渡って活動してきました。

全く白紙の段階から始まり【行動計画】の策定が中心であった第1期の委員会。1期2期で誕生した13の議題チームが【行動】し成果を实らせ始めた第2期の委員会。

それらに続く、この第3期では、第2期まですすめてきた議題チームの取組を、より行動に特化したプロジェクトチームに再編しました。さらに、100人委員会全体の行動を作っていくため部会という制度を取り入れたチャレンジの1年間でもありました。そして、全く新しい市民参加の形、市民協働を試行錯誤して活動してきた3年間の集大成の年でもありました。

本報告書は第3期における13のプロジェクトと5部会の活動・成果の記録としてまとめたものです。

代表 平井 誠一

早いもので100人委員会が設置され3年余の歳月が流れました。この委員会の代表に就任した2009年の秋が懐かしく思い出されます。

この委員会の特徴でもある「何も決まってない」「委員自身がやることを決める」という「白紙からの議論」が本当に成り立っていくのか？私も委員個々人も半信半疑の中スタートした委員会でした。また、「共汗」という言葉を掲げつつも、行政も市民もそのあり方を具体的にはイメージできていなかったかと思います。

私は100人委員会の活動を通じて、一緒に汗をかくだけが「共汗」ではないと考えるようになりました。例えば、地域に課題（病気）が生じた時に、その痛い場所にすぐに注射をうちに行くのがわれわれ地域活動の仕事。一方で、病巣をしっかりと取り除くのが行政の仕事。互いの役割分担を理解・尊重し、それぞれの役割をしっかりと遂行する。それが本当の共汗ではないでしょうか。

第3期では「わたしやります！」というキーワードが生まれました。「バラバラで一緒」という言葉もありました。勇気をもった市民一人ひとりの「小さな一言」が人々の共感呼び、仲間が集まってチームになっていく。その成功事例の積み重ねが多く、市民に勇気を与えたように感じています。

メンバーの課題意識や考え方もさまざまです。その中で、全員が異なりを認め合いながら一緒になって活動するという、この委員会の風土が素晴らしい。異なりを越えて協働していくことで、真の共汗が生まれてきたのだと思います。

3期までの活動を通じて、地域への熱い思いを持っている市民がこんなにたくさんいるのかと何度も驚きました。そんな皆さんとの出会いに感謝しつつ、これからも京都の未来のために共に活動できることを願っています。

『未来まちづくりの3年間』

代表 宗田 好史

昨今の日本には閉塞感が漂い、必要だとの掛声の割には改革が進まないことに苛立っている人が多い。変革を拒む様々な組織が殻を閉ざし、風の通らない社会に悩む若者がいる。しかし、全国の至る所で風穴を開ける力が出てきた。京都では未来まちづくり100人委員会が歴史や伝統の一杯詰まった社会に風穴を穿つ努力を続けてきた。

この3年間の実験に参加した人は、従来の市民参加が大きく変わったと思うだろう。ただ委員は百数十人、大多数の市民の実感には遠いのだろう。確実に言えることは活動する若者が第一線に登場したこと、だからまちづくりの世代交代が進み出した点である。

100人委員会にはあらゆる年代の委員がいた。地域でもNPOでも世代間の交流、協働は難しい場合が多い。100人委員会では若い事務局の意識が、従来の常識を30歳分ほども若返らせたこともあり、熟度をやや欠くものの老若の隔壁を取って若さを力にする仕掛けが活きた。だから継続する中で、若者の力が難しさを乗り越えて大きなうねりを起こした。経験者の躊躇を一気に吹き飛ばす勢いで、新しい風が吹き抜けたような3年間だったと思う。

100人委員会では風に乗った若者と女性の元気が際立っていた。未来は彼らの進む方向にある。新しい時代はこうして始まっていくのだろうと感じた委員は多いと思う。



京都市未来まちづくり100人委員会について

京都市未来まちづくり100人委員会（以下100人委員会）は、幅広い分野の市民の参加を得て従来の行政の縦割りを排し、京都のまちづくり全体に関するテーマを市民自らの発想により、大局的な観点から設定したうえで、今後のまちづくりの方向性や具体的な取組方策について議論する「市民組織」として平成20年9月に設立されました。

100人委員会は従来の審議会や委員会とは異なり、

- ① 市民自らがテーマを設定し、白紙の段階から議論する「市民主体の委員会」
- ② 提言するだけでなく、自ら実践する「行動する委員会」
- ③ 行動、実践を更に議論に反映させる「進化する委員会」

として活動を進めてきました。

なお、運営は京都市から、公募で採択された2団体（NPO 法人場とつながりラボ home's vi、NPO 法人アートテックまちなみ協議会）による連合体に委託され、「市民主導の運営」を行ってきました。

第1期（平成20年9月～平成21年9月）

平成20年9月の第1回会議（設立総会）から100人委員会は148名の委員と共にスタートしました。

設立総会で初めて集まった委員はワールドカフェ^(※1)などを通してお互いを知り、京都の問題点や理想像、100人委員会の在り方などを共有し、第2回、第3回定例会議でのオープン・スペース・テクノロジー^(※2)により白紙の状態から55の議題を形成しました。その後、第4回定例会議で開催された「議題チーム決定会議」により継続する14の議題チーム（のちに2つのチームが合併し13チームとなる。）が誕生し、第5回定例会議から第11回定例会議の間に議論を深め行動計画をつくっていきました。

第12回会議は<第1期>の締めくくりとして『成果報告会』という形で開催、1年間議論し作りあげてきた行政等に対する「提言」や自らの「行動計画」を発表するとともに、行政や企業、市民団体などに広く協働を呼びかけました。これらの内容は提言書としてまとめ、平井・宗田両代表幹事より門川市長に手渡されました。

※1 ワールドカフェ

人々がカフェにある空間のようなオープンで創造性に富んだ会話ができる場とプロセスを用意することで、組織やコミュニティの文化・状況の共有や新しい知識の生成を行う対話手法

※2 オープン・スペース・テクノロジー

5人から1000人までの参加者が一堂に会し、参加者が自ら出した議題をもとに自由に集まり、主体性をベースとした話し合いを通して、垣根を越えた問題解決を行う会議手法

第 2 期（平成 21 年 10 月～平成 22 年 9 月）

平成 21 年 10 月には市民公募委員約 30 名を加え、128 人のメンバーによる第 2 期が始動しました。再スタートした委員会では再びオープン・スペース・テクノロジーが実施され、新たな議題も含めた 13 議題チーム（1 チームが第 1 期で卒業）で進んでいくことになりました。

第 2 期の活動は各議題チーム毎の進行に重点を置きました。議題チームは行動計画に基づき、関係する行政担当課と情報交換するなかで精度を高め、行動計画の練り上げを行い、実際に行動に移すための準備を進めていきました。

その中で、定例会議の午前中に開催チームを越えての『横串勉強会』、チームの連携を促進するための『全体集会』での報告・相談・告知を行うシステム、また全チームの『掲示板』を会場に設置することによる情報の見える化のための仕組みづくりを行いました。これらにより、チーム力の強化やチーム間の連携が図られました。

平成 22 年 3 月に開催された第 6 回定例会議からは今までしてきた議論の発信の場および幅広い市民の巻き込みを目的として『定例公開 mini フォーラム』がスタートしました。30 分の時間枠の中、各チームは趣向を凝らしながらプレゼンを行い 100 人委員会の他のチームおよび傍聴参加の一般市民に向けて発信を行いました。

これらのプロセスの中から第 2 期は様々な行動が生まれました。問題意識から集まる「議題チーム」から一定の目標を定める「プロジェクト」に変わった瞬間でした。

第 3 期（平成 22 年 11 月～平成 23 年 12 月）

■ 第 3 期スタート

平成 22 年 11 月、新たに市民公募委員約 30 名を加えた 131 人のメンバーによる第 3 期がスタートしました。

第 3 期では、より行動する委員会を志向し、第 2 期まではテーマ別に分かれていた議題チームを、プロジェクト単位のチームに再編しました。新たに誕生した 1 プロジェクトを加えた 13 のプロジェクトチームごとに様々な取組を生み出しました。

また、第 3 期からの新たな試みとして「部会」がスタートしました。

第 2 期の終わりに行ったアンケートおよびワークショップにおいて一番大きかった声が「100 人委員全体を活かした行動を行いたい」というものでした。このことから、100 人委員会全体での行動を企画する「部会」という制度が誕生することになりました。

有志が集まった 3 回にわたる「部会準備委員会」で、部会の具体的なあり方を検討。その結果、①政策分野をテーマとする分野別巻き込み企画部会（「福祉・コミュニティ部会」「環境・景観部会」「観光・交通部会」）②100 人委員会という市民協働のモデルを検討し発信する「100 人委員会モデル形成部会」③100 人委員会内部の交流を活性化する「100 人委員会活性化部会」の全 5 部会が誕生しました。

■ 委員自ら盛り上げてきた定例会議

毎回の定例会議は基本的に全体会議、部会会議、フリータイムで構成されました。

全体会議では、進行についての説明や重要事項の委員会全体での共有、部会会議では全体での行動に向けた行動計画などの検討、フリータイムではプロジェクトチームを中心に委員独自の会議が行われました。

第3期の特徴として、委員それぞれが趣向を凝らして定例会議を盛り上げたことが挙げられます。

これまで事務局が設置していたカフェスペースを、100人委員会活性化部会が中心となって発展させ「みつばちカフェ」として運営。部会やチームを超えて委員同士がリラックスして語り合う場になりました。他にも、委員同士の情報交流を促進する「みつばち通信」の発刊や懇親会の開催等、様々な取組が行われました。

活性化部会以外でも、会議開始前の午前中の時間を利用した委員主催の市政勉強会が開催されるなど、委員皆で会議をつくり上げていく100人委員会に変わっていきました。

■ 分野別巻き込み企画部会の全体行動

分野別巻き込み企画部会はそれぞれのテーマ性を持って全体行動を企画し、行動に移していきました。6月には観光・交通部会主催で「外国人からのメッセージ～京都の観光・交通～」を開催、7月には福祉・コミュニティ部会と環境・景観部会が共同で主催する「震災から考える京都～いのち・生活・未来～」が開催され多くの市民と共にそれらの問題について考える機会をつくりました。

■ 多角的にモデルを探求し発信した100人委員会モデル形成部会

並行してモデル形成部会では、3年間の活動を振り返り「協働」のモデル化を目指すとともに、3年間の成果を広く市民に発信する全体行動の企画を進めました。モデル化に際しては、委員個人とチーム・プロジェクトの2つの視点から振り返りと分析が行なわれ「100人委員会モデル」が提案されました。

全体行動では、「まちづくりに関心のある市民が語り合う日」をコンセプトとして、平成23年10月23日に新風館とこどもパトナを会場に『京都未来まつり2011』を開催し、市民のみなさんとまちづくり活動の意味や楽しさを共有し語り合いました。

■ 第3期終了、そして新たなスタート

そして3年間続いてきたこの100人委員会も12月をもって一度終了となります。

第3期では、これまでの議論や経験に基づくプロジェクトチームが、様々なアクションを生み出してきました。100人委員会の仕組みがなくても今後も活動を継続するプロジェクトも多く、中にはNPOとして本格的に活動を始めるものもあります。また行政等の団体と連携してきたことで、今後はそれらの団体の取組として受け継がれ、継続していきそうなプロジェクトもあります。着実に成果が生まれ始めています。

この3年間の活動の中、今まで出会うことのなかった他の世代、他の分野の人たちが出会い、語り合い、そしてつながっていきました。このまちづくりの仲間の広がりが今後大きな力を持つことになると思います。ここからが本当のまちづくりのスタートなのかもしれません。

